

年上の女たち

中山あい子

光風社書店



年上の女たち

★定価はカバーに入っています

《検印省略》

著者 中山 あい子

発行者 豊島 澈

印刷者 大久保 泰 男

発行所 株式会社 光風社書店

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話 東京(03)〇二三八番
振替 東京 一二九一三番

落丁・乱丁はお取替いたします。

手負いの獣たち

三

北国に恋うる女

六

化石の鳥

一〇

蔭の声

一五

赤い運河

一九

狂い咲き

二三

装幀
前川
直

手^て負^おいの獣^{けもの}たち

中央線の階段の上に立つと、京子はいつも一瞬目がくらむ。人の波が流れ落ちてゆく。

東京駅の朝の騒音の中で、幽かにきこえる自分の靴音が他の音に混じるのをさけるようにわざとゆっくりと歩いた。

今朝の京子はかなり不機嫌で不幸である。

こちらの意志を無視したように開けたり閉じたりしている自動扉まで気にくわない。まるで飽き飽きしてあくびをしているような扉の中に入ってゆくのがしゃくだ。

おまけにエレベーターはつめこみすぎた空腹の浮浪者の口のようにごった煮の匂いにする。

「お早ようございます」

秘書課はタイプライタアの倉庫のよう。若い娘たちが揃いの事務服に替えて、もう気の早いのはパチパチ叩いている。

京子は娘たちが、一瞬緊張して自分をみて朝の挨拶をしてくるこの瞬間がとても厭だ。この部屋の年長者、上役、という自分の背にしみこんだもの、重さが厭なのである。

京子は三十八歳の係長である。

組合の婦人部で、さんさんもめた揚句、会社では女の役職を認めた。

あの頃は京子も若くて、男と同時に入社した女たちの待遇に不満だったものだ。しかしいま、女に役がつくことのやりきれない不満の中にいる。

女で係長ということは、入社後二十年近いということの看板である。

ああ、タイプ室のあのおぼはん——
湯沸場でささやかれる娘たちの若い惨忍な私語。上役の女に向って、如何にも神妙に、挨拶をしてみたい衝動にかられる時がある。

見たところ、少しも彼女らと変らないという自負があるだけに京子の屈折はきびしい。
電話を待った。

以前は必ず九時十分頃には鳴ったものだ。ここ一カ月ほど、いつも苛ら立って京子がダイヤルを廻すようになってしまった。

今日こそ放っておこうと思っても、未だにそれが出来ない。

「ああ」と低い返事がかえってきた。

隣りの営業の部屋の牧野の机の様子が目に浮び、端正な顔が、疲れているのが分る。

「感心ね。ちゃんと来てるのね」

「そりゃ勿論、私としては此処の社員のつもりですからね、これでも」

次の言葉を待ったが、それはなかった。

ごめんね、と小さくささやくのが無上に嬉しかった時期がある。だがもう牧野はそれを言わな

昨夜もいつものように二人分の食事を作り牧野のための床も敷いてあった。

どうしたの？　ともうききはしない。どうしたかは分っているのだ。

僕が下宿で一人で寝るわけないさ——初めてあれをきいたとき、京子は笑った。

牧野のそんなところにひかれていたのだ。

半年つづくなんて珍しいんだぜ。清潔な寢床と、うまい飯が大半の原因だがね——

それでも京子は笑っていられた。いや、笑っていなければならなかったのだ。

新鮮な清浄野菜だ、と自分売りつけた牧野は、二十六歳の若者である。

あんたみたいな色香の失せない小母さんに可愛がられるのがユメだったのよ——

牧野はそういう言い方で、初めから京子の周りをうろついていた。

こういうことには凄くまめなんだ俺って。

去年の夏、ひっそりとテレビをみていた部屋に突然現われた牧野は、馴れた調子でさっさと上ってきた。

ブライベートの場所を荒らされたくはないという京子の一種の冷たさは、会社の中でも有名で、まだ誰も訪ねたことのない住居である。へえ、一人でいるの？　二DKかア——

キヨロキヨロ見廻す牧野に怒る気も失せて、京子はコーヒーをいれた。

興味のある女は徹底的に追うのが趣味だと彼は正にそうほざいた。

君の女のスクラップになるのは御免だよ、と、京子も気軽に受けこたえ、久しぶりにかなりたのしくなっていた。

第一、牧野は小柄で、男というより少年としか思えない体形のため、京子は全く余裕をもって接することが出来た。

好きにはなっても、表と一緒に歩くタイプじゃないわ——

へん、それはこっちの科白だよ。小母さんと歩くなんて小学生じゃあるめえし——

あんな始まり方をした牧野に、何故こうも苛ら立つのであろうか。

表を一しよに歩きたくはないが、室内で可愛がる小鳥は欲しかったのか。

案外男っぽい牧野は、俺はペットじゃないからナ、と釘を打つのを忘れなかった。

やりてえようにやる——

彼はいつもそうだ。

「嫉妬かよ。柄じゃないねえ」

京子は黙ってお茶をいれ、そう言われればずっと口を利いていなかったのに気付いた。

牧野は二カ月前、到頭下宿をたたんで京子の処へ移ってしまったのだが、勿論そのとき京子は反對した。

別に傍^{はた}を気にしているわけではないが、会社に知れるかも知れない。

大丈夫、大丈夫、住民票はあのままにしとくからさ。そのうちにゃ出てくよ——
殆ど帰ることのない下宿など、月々の払いが勿^{もつ}体^{たい}ない。その分自分で使った方がいという。

俺は天涯孤独だしよ、あんただってそれに似たようなもんじゃないか——

牧野は祖父が死んでから二年になる。最後の肉親だった。

祖父母に育てられ、その送金で大学へゆき経済的な不安はなく育った。

生後二カ月の子供を置いて、母は東京にいる父の面倒をみるために月に二度ずつ上京していたのだが、二十年三月九日の大空襲の夜、父の工場で、二人共に行方不明になった。

俺は戦無派、とうそぶくが、戦火に父母を失った者がなんで戦無派であらう。

あんたらはね、疎開派、焼跡派、一等いやらしい年代さね——という。

京子は代々木の家の庭を蒼くそめて光った焼夷^{しょうい}弾^{だん}の音をいまも忘れてはいない。

ラジオが叱^{しか}咤^たしていた。部署を離れる者は非国民だ、と言っていた。

京子は十三で、女学校に入ったばかり、モンペの上に制服を着ていた。

父は直撃弾を受けて縁側の下で、黒こげになり、祖母は壕^{さく}の中で失神し、まだ生あたたかい灰の上に作ったトタン張りの町会の小屋の中で三日後に死んだ。

母は第二人をつれて埼玉に疎開^{そかい}していたが、京子はそのまで行くのに二日かかった。

お祖母ちゃんはお家の庭で死ねて本望^{ほんもう}だったわね——と母は泣いた。

父の骨と、祖母の骨を胸に下げ、京子は母にとりすがってその腰を打ち叩いた。

恐怖と悲しみと安心とで、小さな拳に力が入った。嫁の実家へゆくことを拒みつつけた祖母を疎開先に連れて来ることに決り、京子が迎えに上京した夜のことで。

小さな弟が病んでいて、母が出掛けられなかったのだが、あの父の最後を母にみせなかったことを、京子はずっと悔いてはいない。あの場に母が居合わせたら、母は死んだかも知れない。絵空事のように非現実な思い出の中で、京子は宙をうくように生きた。

十四五年の間に、弟たち二人は十五にもならぬ中に、次々と死に、八年前に母も疲れ果て、死んでしまった。

見渡す限り死ばかりである。

それを称して焼跡派というのか――

「昭ちゃんも焼跡派じゃないか」

「俺はちがう。この目でみてやしないさ」

偶然にしろ、二人がいま斯うしてひっそりとお茶を飲むことに、二人の心のふれ合いを考えないわけにはゆかない。

牧野昭一が京子の身上を知って近付いたわけではなく、京子が彼のことを承知していて哀れんだのでもなかった。

つれづれの話題の中で、徐々に判明してゆく悲惨な身上話であった。

俺さあ、お袋の味知らねえだろ、だから暮すのは年上がいいのかなア。フロイトだな——
というような話であつた。

京子は、牧野の片意地張った態度が、実は耐える悲しさなのか、と思うとき、思わず、抱きしめてやりたくなる。

よしてくれよ。身の上話で憐れまれるなんて俺好かねえよ——

滅多に他人に話したことはないといわれ、京子はふと、牧野を本気で愛しているのに気づいた。

それは死んだ弟たちへの相姦的な愛だな、これもフロイトだな——

だからいま、彼の前で一言もしゃべらず、だまってお茶を出してやり、嫉妬か、と問われて悲しい。

「そうよ。嫉妬よ。女だもんね」

昭一のような男に女は分らないのだ。彼にとって、女とは精神の深い部分でかわるものではないにちがいない。心を持つているとさえ思っていないのではないのか。

「一人じめしようたってそうはいかないぜ」

一緒に住む気になっただけでも他の女たちとはちがうと言いたげである。

だが、住むということは彼の合理主義ではないのだ。

「私でなくたっていいわけだものね。係累のない女一人、結構生活も楽だし、他の女みたいに金もかからない。よっぽど不便の時だけ抱けば、枕よりまだからね」

「年のせいかねえ。ひでえひがみだな」

昭一はそれなり不機嫌に黙った。

人の部屋へ断わりもなくどすどす入ってきて居坐ってなによ——と京子はどなりたい。未だかつて、こんな男を知らなかった。

まだ母が生きていた時、田舎で縁談があった。時折、帰る京子をみて市の商工会議所の男が申込んだのだった。

きびきびした都会の青年ばかりと接していた京子にとって、見合の相手は妙にうわずって初心で具合わるかった。

会社でも二十六七までは、上役の世話で結婚話は二三ありはしたが、要するにびんと来なかった。

あの時期に他の娘たちのように、すんなりと一人の男と結ばれていれば、今頃になってこんな若僧にうそぶかれなくとも済んだらうに。あんたやっぱり処女じゃなかったナ——

昭一の最初の言葉である。

あの時限り、この男を突っぱねるべきだったのだ。会社の中でも謎なぞになっているらしい京子の処女非処女論を彼女自身冗談めかしてきかされることがある。

まさか、それを代表して試しにきたわけでもあるまいが、案外そんなところで、笑いものになっているのかも知れない。

あんたの処女を奪った奴は誰？

昭一は、ひょっとしてそれが会社の中にいるのではないかと思うらしかった。

玉木は会社の同僚ではない。

あれは母の病気が思わしくなく、大宮の病院に入院していた頃だから七年ほど前になるだろう。母の担当の医師イシタインであった。

二年ほどの間に母は三度入院した。

その間に玉木はインターンから本物の医師になり、三度めの入院の時、京子は初めて玉木にさそわれた。

母はやがて死ぬだろう。と彼に告げられ、分ってはいたのに妙に恨めしかったものだ。

代々木の焼け跡に戻らず、永いこと草ぼうぼうの空地であったが、十年の余も放っておいて売ったのは母の才覚ではない。只、夫や子供らとの幸せだった日々を、時たまたまずねては思い出すためにそうしていたのだ。

田舎で、母は茶の湯と花の師匠をして、弱い二人の男の子のために働いた。

実家の地所が公団に買収ばいしゅうされて、母にも分けられたので、いそいで代々木の空地を売る必要もなかったのだろう。

それを売ったのは京子である。

病気で収入のなくなった母を叔父たちの厄介者やっかいものにしたいくはなかったし、京子自身一人で暮すのが

精一杯の時だ。

税金をひいても二千万近い金になった。

お父様の血を吸った庭に——誰とも知れぬ人々が笑いさざめく家が建つのは我慢できないと母は泣いた。

お父さまは一滴の血も流さず、からからに焦^こげて死んだわ、とは言えなかった。

人の死の上に家を建てて、生きてゆくのが人間ではないのか——京子は母の感傷にとりあう心のゆとりはない。

だが、あれを契^{けい}機^きに母は衰えていった。

玉木先生は京ちゃんを好きなのねきつと——母はせめて生きている中に娘の将来を見きわめたいといった。

医者嫌いの、と京子は冷たく言ったが、その時は既に玉木に抱かれた後だった。

あの先生は、真面目で、看護婦たちの評判もいいし、そのうえありがちな浮いた話をきかないわ。珍しいわ——

その割りに手の早い男だったわ、と言いたかったが、やめておいた。

三十になって初めて男に抱かれたことで、京子は玉木に笑われたような気がした。まさかと思つたにちがいない。

全て承知していたことでも、現実^{じつ}にそれが自分の身におこっていることで京子はおびえそれをか